

ひとつのいのち

—その気付きのための理性(4)—

川崎医療短大 医用電子工学科
川崎医科大学名誉教授

中 川 定 明

(平成5年10月14日受理)

A Common Life of All the Living Things
— Reason for the Enlightenment of Itself (4) —

Sadaaki Nakagawa

*Professor Emeritus, Kawasaki Medical School
Kurashiki, 701-01, Japan
(Received on October 14, 1993)*

概 要

既報した、ひとつのいのち(1)では人間と生物の内部宇宙の客観的特性について、(2)では生命の起源としての外部宇宙の認識。(3)では生命を産んだ地球と宇宙の関係、地球と生物の発生、人間の心と身体の関係に重点を置いて記した。言葉を換えていえば、(1)では人間を含めた生物について「知性」が到達した認識を、(2)では「悟性」が到達しうる限りの形而上的宇宙論を、(3)では「感性」に重点を置いて記した。続いて(4)以下で、副題にある「いのちの気付きのための理性」、つまり「こころのありよう」について考察する。(4)の内容は第六章「人間の特色」、第七章「理性について」である。

Abstract

We have argued in “A common life of all the living things, Part 1” an objective characteristics of the inner spaces of man and living things, as an intellectual recognition, and in the “Part 2”, about the knowledge of an origin of a common life, as a cosmological realization, and in the “Part 3”, the interrelation of the earth and the space, the development of the earth itself and that of a living things on earth. In the following Parts, we intend to consider the subtitle of this paper, the “reason for the enlightenment of common life of all the living things”. The chapter 6 of the Part 4 deals with the characteristics of the humankind, and the chapter 7, deals with the reason of the humankind.

第六章「人間の特色」

I. 人類の起源

ネズミくらいの小型で温血をもった哺乳類が、敵の追跡から逃れるのに都合がよい樹上を生活の場を選んだことが、人類へ向かう第一歩であったという¹⁾。その小型の哺乳類が、地球の氷河時代に漸増する寒さに適応した熱放散の少ない大型の猿に進化するにつれて、4足で樹上を移動することが困難になった。そのため、腕で木の枝を掴んで移動する「腕渡り」を会得した。それが、頭から足までを垂直に保つ2足歩行の準備になった。気温の低下という

環境の変化に合わせて、樹上から地上へ生活の場を移さねばならないようになった時、4足歩行の猿から別れて2足歩行ができる類人猿に進化した。この進化は、既報の今西錦司²⁾が記した(第2報)大進化で、それは比較的急速に進化を遂げたと考えられた。スタンレー(1981)³⁾も今西と同様に進化は漸進的に起こるのではなくて断続的(段階的)に起こることを明らかにした。完全な2足歩行の猿人・オーストラロピテクスになったのは200万年前といわれている。猿人とは、人が猿からゆっくりと進化したという古い考えから付けられた名で、決して人ではない。次に記す原人も同様である。気温の極度の低下が進んで、オーストラロピテクスは生活の場として洞窟を選んだ。約150万年前に、洞窟に住んで直立で歩く原人が火を使った証拠がある。第3紀から第4紀にかけて、夏と冬の気温の較差が少ない赤道下のアフリカに類人猿・原人を含めて哺乳類が集中した。赤道といっても現在の様な熱帯ではなく、地球上は寒冷に支配されていたと想像される。原人は、開放された手の利用と火の発見によって生活が楽になり、手の使用によって神経系と脳が急速に発達して、3万5千年前にヒト科であるホモ・サピエンスが生まれた。原人とホモ・サピエンスとの境はまだよく分かっていない¹⁾。オランウータンやチンパンジーなどの類人猿が石で堅い木の実を割ることが知られているのは道具の始まりともいえるであろう。猿人オーストラロピテクスは原始的な石器をもっていた。石球を皮ひもに結んだ飛び道具さえあった。人間は道具をつくる動物だといわれるが、道具をつくるのは人間に限らない。旧原人であるネアンデルタール人は仲間の死者を埋葬することを知っていた。洞窟のそばの地面に穴を掘って死体を埋め、食物や石器などを副葬した。このことは彼らが靈魂についての何らかの観念をもっていたと考えられるが、「時間」の観念はまだ持っていなかったと思われる。彼らはまた食人の習慣ももっていた。それは、他の靈魂をとり込むことであった¹²⁾。

1987年にシカゴで開かれた全米人類学会で、A. ウイルソンは、現在地球上で生活しているすべての人類に共通の祖先は、20万年前にアフリカで暮らしていた女性であるという「イブ仮説」を発表した。この仮説は人類の起源を驚異的に近い過去に求めたものであって、その根拠になったのは、化石による研究に対して、遺伝子による研究法を採用したことによる。1970年代から、ウイルソンはL. キャンとの共同研究で、現存するいろんな人種の女性の体細胞のミトコンドリアと、化石からのミトコンドリアの遺伝子を比較し、それらの起源をたぐっていくと、20万年前のアフリカに行き着くことを突き止めた。ミトコンドリアの遺伝子は細胞核の遺伝子と違って、母親がもっているものだけが伝えられることが分かっていたが、従来、人類の祖先といわれてきた化石は実は人類のものではないことが分かったものである。人類の起源を単純に1本の進化の系列の上において考えるべきではないという¹³⁾現在のところ、猿人オーストラロピテクス、猿人ピテカントロプス、旧原人ネアンデルタール、洪積世ホモ・サピエンス、沖積世すなわち現代のホモ・サピエンスという5つの段階が認められてはいる。しかし、洪積世ホモ・サピエンスはネアンデルタールとは別個に、かつ並行して進化したことは確実らしい¹³⁾。現世人ホモ・サピエンスはどのようにして知性を持つようになったのか? イギリスのA. ドーキンスは⁴⁾、自信・雷・嵐・その他の激しい自然現象に遭遇し

また太陽、月、星の動きを意識し、日食、月食に驚いて恐れを懐き、自然現象を支配する超越的な者を想定して、それへの畏敬の念を持つようになった時に原人から別れてホモ・サピエンスという知性をもつ生物に進化したのであろうという。知性は人類の先験的能力であり、その知性から論理的能力が生まれたという。現世人ホモ・サピエンスが衣類をまとう習慣をつくり、脱毛するようになった時期は定かでないが、比較的短い期間で無毛の人類になったと考えられる。彼らが洞窟に壁画を描いたのは1万5千年プラスマイナス9千年前である。たとえば、南フランス、ピレネー山地のラスコーの壁画には馬、牛、ヤギ、鹿など動物の群と、動物を獲る人のほかに、呪文をとこなえる人の姿が描かれている。同じような壁画はアフリカでも見つかった。呪術をおこなうとは、言葉を持っていたことを示す。単なる合図や呼び掛けの手段はすべての生物が多少とも持っているが、「言葉」がそれから徐々に進化したとは考えられない。「言葉」はホモ・サピエンスが知性を得た頃に生まれたのであろう。

呪術をおこなう者は集団の指導者であり、カリスマ性をもったシャーマン（巫女）もそのひとりであったと思われる。こうして部族ができ、住みついた地域に応じて民族ができたであろう。部族間に利害関係が生じて相互の争いが生まれ、果ては殺しあう闘いも生まれたであろう。闘争は互いの知性をより高度なものへ進ませる。どんな動物でも「いのち」を失う恐怖は「本能的」にもっているが、「いのち」を持った同類を争いによって殺すことの罪悪感に責められる時にも、現世人ホモ・サピエンスは罪を裁く「超越者」の存在を感じたのではないかという⁴⁾。それが、およそ3万5千年前である。こうして人類の祖先は時間と空間の存在に気付いたのであろう。時間と空間を知るとは、過去と未来の意識をもって、先祖のことや死後の世界（住処）のことが気になることで、先祖の霊を敬い、天国を憧れ、地獄を恐れるようにもなったのであろう。地球上の多くの民族が「神話」をもっているのはこのことを物語る。「言葉」と「神話」はあまり時間を隔てずに誕生したのであろう。自然、生命、宇宙の現象を不思議と感じ、その由来を説明するために神話は語られた。多くの神話に共通しているものは、民族の誕生物語であり、人間が神の手によって造られたという設定である。たとえば、ギリシヤ神話⁵⁾には「世界は平たい円盤状で、自分たちの国はその中央に位置する。神々の住まうオリュンポス山が国の真ん中にある」と記されている。わが国の「古事記」の「国生みものがたり」はギリシヤ神話より新しい。

ともあれ、神話は、いわゆる「語りて」によって伝承された。優秀な民族に「文字」が発明されて「パピルス」や「木簡」或いは「陶片や石」に記されるようになった。最近、中国で、紀元前2千3百年頃の文字とされていた最古の甲骨文字よりもさらに800年遡る文字が、土器片に刻まれていたのが発掘された。

日本列島は約1万年前、氷河期の氷が解け、海水面が上がって大陸から分離してできたという。日本列島を含む東北アジアに人類最初の土器が出土したのはその頃のことであって、土器文化の時代（日本でいう縄文時代）は1万年も続いたことがわかる。鉄器、銅器、金銀器がつくられ、文字の発明に続いて「歴史」が作られたのは、統一国家が生まれた紀元前3

世紀の中国で司馬遷によって編纂された「史記」が最初である。「言葉」から「神話」「文字」「歴史」を創造した人類への進化の過程は「前頭葉」のめざましい働きがもたらしたものであり、その過程は、人類の生れた時期を「イブ仮説」にしたがって20万年前とすれば、45億年の地球史の2千万分の一にも足りない極めて新鮮な出来事だと考えられる⁶⁾。

II. 理性について

哲学はギリシアで始まったといわれ、ギリシア哲学が西洋文化の基礎になったことに異論はない。プラトン、アリストテレスは「哲学の始まりは驚きの感情である」といった。哲学 Philosophia という言葉を使うようになったのは彼らであるが、「驚きの感情」とは上記した様々な自然現象が何者かの力で生起する事への驚きと畏敬の念から出発したのであろう。プラトンはその何者かを「イデア」と呼び、アリストテレスは「エネルゲイア」と呼んだ。天文学、幾何学その他の古代の科学は、全ての自然現象をどのように理解するかを目的とした思索であった⁷⁾。そこで、哲学はすべての学問の母体であるとされた。プラトンの「イデア」は中世以降のキリスト教神学では「神」へ、さらに近代哲学では「理性の思索」へと変わって行く⁷⁾。

人間の「理性」について、真向から思索したのはカント（1724—1804）が始めてで、『純粋理性批判』⁸⁾がそれである。『純粋理性批判』は非常に語彙が難解で、通俗化を許さないものがあるが、原訳文と解説書⁹⁾をたよりにして敢えて要約を試みた。カントは、理性とは物事を論理的に考える能力であり、直感とか情意的な把握に対立する知力であるとする。また、純粋理性とは個人の経験から生まれた理性ではなく先験的に人間にそなわった思考能力とする。カントは思考の対象を4つのカテゴリー（範疇）——対象の分量、性質、関係、様態——に分けて考える独特の形式を編み出した。たとえば「私は考える」ということをカテゴリーに従って分析的に分けて、私は単純な主観として思惟する〔性質〕とか、私は私の思惟のいかなる状態においても常に同一の主観として思惟する〔分量〕と書かれている。これらの記載はカントの語彙に不慣れな者には、意味が掴みにくいものであるが、ともあれ、カントは、この思考の形式に当てはまらないものを論理的思考の対象から除外した。しかも、純粋理性の思考にはテーゼ（正命題）とアンチテーゼ（反命題）の矛盾する対立思考が必ずなりたつといい、4つの正命題と反命題を、紙面の上下半分づつに分けて印刷するという独特の頁をつくった。第1の矛盾思考は時間と空間に関するもので、「世界は時間的な始まりをもちまた空間的にも限界をもつ」正命題にたいして、「時間は始まりをもたないし空間的にも無限である」という反命題をあげた。第2の矛盾思考は「世界には単純なものか、単純なものから成る合成物しか実在しない」と「世界には単純なものはまったく実在しない」が存在論として考えられた。第3は、現象が起こるのは「偶然か必然か—因果関係の有無」、第4は、「絶対的な存在者（神）がある」と「ない」を対立させた。そして、矛盾する対立思考を論理的に統一する「批判法」によって知識の客観性を求める試みをしたうえで、この方法に乗らない「不可知なもの・超越的なもの」は客観性がないという理由で知識の対象か

ら除外した。「不可知なもの」を否定するのではなくて、客観的に普遍妥当なものだけを人間の知識としたのである。純粹理性では超越的对象を知ることにはできない。「神」は不可知であるからという。つまり、『純粹理性批判』は人間の有限性を問題にした書であり、理性一般の能力の批判である。カントの哲学は「制限の哲学」だといわれる⁹⁾。このように、不可知を避けて思考を制限したところに近代科学の基礎が生まれた。

『純粹理性批判』から筆者の印象に残ったところを拾って、理性の章の締め括りにしたい。「自然科学には無数の憶測があり、これらの対象を説明する鍵はわれわれの思惟のそとにある(507) (注：番号は原典の頁数)」。「理性の自己矛盾を解決する唯一の手段は、あい反する主張がともに偽りであると論定することである(556)」。「動物の具えているすべての器官はそれぞれの効用とすぐれた意図とを有する。(715-818)」。「要するに…理性の原則と方法とを用いて…自然をその最も深い内奥まで究明するだけである(730)」。「こうして、カントは西洋的の理性について真正面から考えた唯一の人であり、その故に近代科学の基礎を与えた人といわれる。

明治維新後、日本は富国強兵をめざして近代科学をひたすら採り入れ、教育を始め学問の多くは西欧のそれに同化した。医学もまた、従来の漢方医学を抹殺して西洋医学一辺倒になった。われわれの多くは、晩年のカントが擬人化(偶像化)された神への崇拜を非難し、カント自身が「自己矛盾の統一」の思惟過程に見出した「形なき神の恩寵」を信じようとしたことを知らない。ジャン・ラクローワは、「カントは神という偶像崇拜を否定し、神学という知的偶像も否定した。しかし、カントは神学的精神無き真の宗教者であった」と記している⁹⁾。

第1次大戦後、ニーチェは「神々は死んだ」とうたった¹⁰⁾。第2次大戦後、ハイデッガーは荒廃したヨーロッパの世情のもとにあって、論理的な思考を「無化-nichten」する「存在と時間」を書いた⁷⁾。その中で「神は、すべての肯定的な規定、たとえば神は全能であるとか、神は無限であるといった規定を内包した絶対的な存在者であるから、神は存在する」というデカルトやライプニッツの言葉のまやかしを無化したという。彼は自分の思想を「無神論」とはいわなかったが、彼の没論理・没合理的な「無化」は無神論に近い。キリスト教国にあっては、第二次大戦後のサルトルのような「無神論」は、やはり重大な思想であった。

西欧で「無神論」が問題になるのは、東洋、とりわけ日本とかなり事情が違うが、第二次大戦後の荒廃は西欧も東洋も同様であり、「無神論」「ニヒリズム」を経て、多くの若者が東西を問わず、百花繚乱の盛りにあるさまざまな「新宗教」を指向してさ迷い、あるいはラジカルな「原理主義」に走ろうとしている。一方で老年・熟年者の大多数は合理主義の殻を破りきれず、功利主義のしがらみから抜けきらずに、若者を引っ張ってゆく「指導理念」を喪失しているように見受けられる。

「答えてくれ！ 一体、神は在るのか、無いのか。」 ドストイェフスキー

文 献

- 1) 浅間一男：生物はなぜ進化したか。Blue Backs, 講談社, 1985年, 東京.
- 2) 今西錦司：進化とはなにか。講談社学術文庫, 1988, 東京.
- 3) S.M.スタンレー・養老孟司訳：進化—連続か断続か。同時代ライブラリー, 1992, 東京.
- 4) 中原英臣, 佐川 峻：利己的遺伝子とは何か。Blue Backs, 講談社, 1991, 東京.
- 5) アポロドーロス・高津春繁訳：ギリシア神話。岩波文庫, 岩波書店, 1990, 東京.
- 6) ベルグソン・松浦考作訳：創造的進化。三笠書房, 1943, 東京.
- 7) 木田 元：ハイデッガーの思想。岩波新書, 岩波書店, 1993, 東京.
- 8) カント・篠田英雄訳：纯粹理性批判。岩波文庫, 岩波書店, 1993, 東京.
- 9) ジャン・ラクローワ・木田 元, 渡辺昭造訳：カントの哲学。白水社, 1992, 東京.
- 10) F.ニーチェ, 竹山道雄訳：ツァラストラかく語りき。世界文庫, 弘文堂, 1940, 東京.
- 11) 下中邦彦編集発行：人類。世界大百科事典第16巻, 平凡社, 1978, 東京.
- 12) 全上：人類。国民百科事典第4巻, 平凡社, 1967, 東京.